

東洋陶磁学会第 46 回大会

研究発表要旨

「薩摩焼研究の現状と課題—この四半世紀の成果から—」

平成 31 年 1 月 19 日・20 日・21 日

鹿児島県歴史資料センター黎明館

< 基調講演 >

薩摩焼研究の現状と課題 渡辺 芳郎

< 研究発表 >

豎野（冷水）窯跡出土の薩摩焼

—型打ち製品を中心に— 関 明恵

茶会記と売立に見る薩摩焼茶入 松村 真希子

鹿児島県始良市における薩摩焼窯跡の調査 深野 信之

薩摩焼と琉球陶器 新垣 力

幕末から明治初期にかけての初期輸出向け薩摩焼の特徴と

展開について—在外資料調査の成果を含めて 深港 恭子

東洋陶磁学会

鹿児島県歴史資料センター黎明館

薩摩焼研究の現状と課題

渡辺芳郎

薩摩焼の歴史に対する関心は、幕末から明治前期にかけて輸出陶磁器に対するそれとして始まり、黒川真頼『工藝志料』(1878年)や農務局工務局『府県陶器沿革陶工伝統誌』(1886年)などで取り上げられるが、多くが窯場に伝わる「由緒」が歴史として語られていた。その後、昭和時代に入り、より体系的、総合的な研究が始まり、前田幾千代『薩摩焼総鑑』(1934年)や、田澤金吾・小山富士夫『薩摩焼の研究』(1941年)などの成果が発表された。とくに考古学的成果を多く取り込んだ後者は、そののち約半世紀に渡って、薩摩焼研究の枠組みとなった。

しかし同時に、その後の研究は、『薩摩焼の研究』の知見や枠組みを踏襲することが多く、1970年代に窯跡の発掘調査が実施されたものの、長い間停滞していたと言わざるを得ない。1990年代に入って、窯跡の発掘調査が多く実施されるようになると(右表)、考古学的情報が急増し、その枠組みに対する本格的な検証と、新たな知見に基づく薩摩焼の歴史の書き直しが始まった。また文献史料や伝来品に対しても、一次資料に基づく実証的な研究がなされるようになった。

1990年代以後の発掘調査や文献史料、伝来品の研究から明らかにされた成果は多岐にわたるが、主だったものとして、(1)17世紀初頭における朝鮮系製陶技術の変容過程、(2)考古学的情報に基づく

編年的研究、(3)生産技術の解明、(4)流通に関する研究、(5)薩摩磁器の生産と流通、(6)薩摩焼の政治的性格、(7)薩摩藩内外における技術交流、(8)幕末～明治期における輸出製品(SATSUMA)の研究などが挙げられる。

本講演では、これら1990年代以後の薩摩焼研究の新しい展開について、いくつかのトピックを取り上げて報告するとともに、現在と将来の薩摩焼研究に求められる課題について整理したい。

薩摩焼窯跡の発掘調査

西暦	和暦	窯跡	所在地	系統
1934	昭和9	宇都窯跡	始良市	豎野
1934	昭和9	串木野窯跡	いちき串木野市	苗代川
1942	昭和17	御里窯跡	始良市	豎野
1972	昭和47	脇本窯跡	阿久根市	磁器
1976	昭和51	豎野冷水窯跡	鹿児島市	豎野
1991	平成3	元立院窯跡	始良市	元立院
1992	平成4	山元窯跡	始良市	龍門司
1998	平成10	堂平窯跡	日置市	苗代川
1998	平成10	弥勒窯跡	始良市	磁器
2000	平成12	平佐新窯跡	薩摩川内市	磁器
2000	平成12	御里窯跡	始良市	豎野
2000	平成12	雪山遺跡	日置市	苗代川(近代)
2001	平成13	宇都窯跡	始良市	豎野
2001	平成13	日木山窯跡	始良市	磁器
2002	平成14	重富皿山窯跡	始良市	磁器
2002	平成14	小松窯跡推定地	始良市	元立院
2004	平成16	平佐大窯跡	薩摩川内市	磁器
2010	平成22	南京皿山窯跡	日置市	磁器
2017	平成29	鰻窯跡	指宿市	苗代川(近代)

《研究発表 1》 豎野（冷水）窯跡出土の薩摩焼—型打ち製品を中心に—

関 明 恵

豎野(冷水)窯(以下、冷水窯とする)は、江戸時代の薩摩焼の窯場で、藩窯・豎野系窯場の一つである。島津義弘時代の豎野系窯場である宇都窯、御里窯(ともに始良市)を経て、義弘の後を継いだ薩摩藩初代藩主・島津家久が居城を鹿児島(鶴丸)城(鹿児島市)に移城した際、これに合わせて元和6(1620)年に開窯したとされる。(田澤金吾・小山富士夫1941)

豎野系窯場は、一般的に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の陶器を中心に焼造した窯場で、藩主やその一族などの上級武士層が使用する茶道具や日用品、中央権力者への献上・贈答品等が生産された。

冷水窯は薩摩焼諸窯に強い影響を与えた窯でもあり、薩摩焼の研究上、重要な価値を有する。また、薩摩焼の窯跡としてもいち早く昭和53(1978)年に発掘調査が行われ、その成果はそれまで美術史上で語ることの多かった薩摩焼を、考古学上の基礎資料として捉える契機となった窯跡でもある。

近年、薩摩焼窯跡の発掘調査が増加し、その考古学的成果が飛躍的に進展してきている中で、冷水窯跡は調査後報告書が刊行されているものの、膨大な量の出土遺物の中には諸制約により未整理な

出土品が多く、その様相は十分に解明されているとはいえない。豎野系窯場の周辺は市街地化が著しく、今後規模の大きい発掘調査は望めない状況下で、昭和53(1978)年に調査された出土遺物の再検討は、薩摩焼の歴史を解明する上で極めて重要であった。

平成25年に一部ではあるが再整理を行う機会に恵まれ、筆者はそれに携わることができた。再整理の結果、冷水窯跡出土品の中に、型打ち成形や糸切り細工成形で製作されたデザイン性に富んだ高品質の皿(以降、型打ち製品と称する。)が大量に存在することが判明した。これらの型打ち製品は、鹿児島(鶴丸)城本丸跡や二之丸跡では発見されず、江戸の薩摩藩上屋敷跡からの出土品と一致するものが確認され、その性格は、中央での重要な宴席等で使用されることを目的に製作された最高級品の「白薩摩」であることが判明した。

そこで、冷水窯跡出土の型打ち製品について、その特徴や性格、年代観について、型打ち製品の製作技法に注目し、薩摩藩内外の他窯と比較検討することや文献史料を参考に報告する。

《研究発表 2》

茶会記と売立に見る薩摩焼茶入

松 村 真希子

初期に作られた薩摩焼の茶陶には、茶入だけがとりわけ多いという特殊な傾向がある。薩摩焼茶入は、無造作に三重に掛けられた釉薬の景色をもち、その独特の味わいは江戸初期から現在に至るまで茶人たちに賞玩されてきた。ではなぜ茶陶制作に茶入だけが突出したのだろうか？島津家には

『島津家文書』という私信や覚書を中心とした武家文書が膨大な量保管されてきた。発表者はその中の書状に江戸初期の茶入の贈答の様子を見いだし、薩摩焼茶入について新しい史実を明確することができた。

16世紀末に秀吉に屈しさらに関ヶ原の戦いの敗

者になった島津家は、17世紀初頭に徳川幕府から領地安堵を受けるまで、存続が危ぶまれる不安な時を過ごした。領地存続を実現させる背景を探ると、その時期に表舞台から去った17代当主島津義弘と江戸老中たちが、茶入献上をする上で密接な関係があったことが書状から読み取れたのである。さらに古田織部が書状で、薩摩焼茶入の作りに細やかな指導をしている事実も見いだされた。そして将軍に献上されるだけでなく、江戸や京都の茶道をたしなむ人たちが薩摩焼茶入を欲しがっている様子も明らかになった。宗湛日記や松屋会記に記録された茶会で薩摩焼茶入が使われた事実との一致をみたのである。

実はその後、17世紀半ばには島津家文書から茶入の贈答の記載は消える。しかし17世紀半ばの『江岑宗左茶書』(1640-1688)を検討すると、国焼の茶入中で一番多く薩摩焼茶入が茶会に登場し、都で人気が続いていたことが認められた。さらに18世紀前半の近衛家熙の『槐記』(1725-1735)や19世紀前半の『井伊直弼全会記』(1844-1860)にも薩摩焼茶入は頻繁に登場した。

そして近代から現代にかけて薩摩焼茶道具の様相を明治時代末期から昭和時代の売立目録に求めたところ、茶入が圧倒的に多く伝世していることが判明した。売立目録の記載から数量、写真、道具の名称等についても伝世する薩摩焼茶入の知見を多く得ることが出来たのである。

今回の発表では、窯跡出土陶片に見られない伝世品の茶入について若干の考察を加えてみたいと思う。

最初にあげるのは「丸壺」と箱書にある、胴部の長い文琳形の茶入である。唐物茶入で分類される「丸壺」とは器形が異なるものだが、近衛家熙は「槐記」でこの形を「丸壺」と呼び、格のある茶入としている。このタイプは現在伝世品を4点ほど確認しているが窯跡から出土していない。

また、小堀遠州が薩摩の窯を指導して作らせたという瓢形茶入宗甫手十手、五手と呼ばれる一群をとりあげる。釉薬が作為的に掛けられた景色の良い茶入が多く人気も高かったと思われる。これらも出土陶片には見られない。

これらの答えを模索する中で、今回「槐記」に薩摩焼茶入を使用した際「京都で薩摩の土を使って茶入を作った」という但し書きを見いだした。伝承の域を超えられない点は認めたいが、その可能性は否定できない。

また御里窯付近からまとまって出土した茶入陶片の特徴についても検討をしなければならない。窯跡出土の大半を占める左回転糸徹底ではなく、非常に薄く轆轤が引かれた軽量の唐物肩衝茶入写しの陶片である。この陶片から想像する伝世品は未だ確認できず、今回調査した売立目録の中にも見出すことはできなかった。

《研究発表3》

鹿児島県始良市における薩摩焼窯跡の調査

深野 信之

鹿児島県始良市は薩摩半島と大隅半島の分岐点、県本土の中央部に位置する。地形的には北側の山地帯から鹿児島湾(始良カルデラ)に向かって網掛川・別府川・思川が流下しており、南側には沖積平野を形成され、地下に良質の粘土層が堆積している。

市内には文献資料等で存在が推定されているも

のも含め、15箇所の近世窯跡(薩摩焼窯跡)が知られ、うち9箇所の窯跡で発掘調査が実施されている。これらは、薩摩焼の6系統(堅野系・苗代川系・龍門司系・西餅田系・平佐系・種子島系)のうち、堅野系・西餅田系・龍門司系の3系統に該当する。

御用窯である「堅野系」の源流といえる宇都窯・

御里窯は、文禄4年(1595)から元和5年(1619)の間、市内の帖佐と加治木に居館を置いた戦国武将・島津義弘が朝鮮人陶工・金海に茶陶を焼造させた窯である。

「西餅田系」の窯は、寛文3年(1663)に修験者小野元立が山ヶ野金山(霧島市横川町)にいた元肥前陶工の北村伝右衛門を指導者に招き開いた元立院窯と、寛文10年(1670)に元立院窯から分窯した小松窯である。18世紀後半には龍門司焼に合流し、蛇蛸釉・どんこ釉・松皮手などの特徴的な技法も引き継がれた。

「龍門司系」は現在も操業する龍門司焼につながる系統で、加治木島津家初代・島津忠朗に招かれた陶工・小右衛門(後の山元焼右衛門)が、山元窯から湯ノ谷窯を経て、その後元禄元年(1688)に小山田高崎に窯を移し、享保3年(1718)頃に現在の小山田茶碗屋に龍門司焼古窯(鹿児島県指定史跡)を

築いたといわれている。それ以来この窯は昭和30年まで約260年あまりの間、連綿と稼働された。焼成された製品は、碗や皿、徳利やカラカラ(酒器)などの小型の食器が主体であり、大形の壺や甕等の貯蔵器は生産していない。

今回の発表では特に「龍門司系」の変遷について、平成24年度に物原の全面的な発掘調査を実施した龍門司焼古窯の調査成果を中心に紹介する。

本調査では、物原の最下層で胎土・器面調整・施釉などの特徴が前身の山元窯跡出土資料と共通する「初期龍門司焼」が出土した。また、層位と出土遺物の検討により、主体的に製陶された碗・皿では、①「初期龍門司焼」灰白色系胎土+単身の釉薬 → ②「白化粧土タイプ」灰色系胎土+白化粧土+釉薬 → ③「白化粧土タイプ」赤褐色系胎土+白化粧土+釉薬という変遷を追えることが確認でき、従来の想定を裏付けることとなった。

《研究発表4》

薩摩焼と琉球陶器

新垣力

文献史料によると、琉球の陶器生産は1616(元和2・尚寧28)年に薩摩から招聘した朝鮮人陶工が、那覇の湧田村で技術指導を行ったことに始まるとされる。同様の説は近年の考古学的成果からも導かれており、現在のところ17世紀前半の琉球陶器に朝鮮人陶工、すなわち薩摩焼の技術的影響が色濃く残るという指摘は概ね支持されている。

琉球陶器は荒焼(焼締及び無釉の製品で貯蔵具や調理具が主体)・上焼(施釉の製品で供善具が主体)・赤物(前二者より低火度で焼成された製品で直火使用の器種が主体)に大別されるが、今回は荒焼と上焼を対象とする。このうち最初に登場するのは荒焼で、特に17世紀前半の製品には、粘土紐積み上げと叩き成形・口縁部内側折り返し・貼り付け高台などの成形、口唇部釉剥ぎ重ね焼きや貝目などの窯詰め、粘土造りの単室登窯とそれに伴う窯道具に同時期の薩摩焼(苗代川系窯場)の影響が

強く看取される。しかし、薩摩焼の技術や特徴を全て受容したのではなく、壺のように薩摩焼以外の製品をモデルとしたものや、植木鉢のように薩摩焼へ影響を与えたと考えられる資料もみられることから、両地域の技術交流は一方的ではなく相互的であったと考えられる。また当該期の荒焼には、成形や窯道具に薩摩焼の苗代川系窯場とは別系統と思われる技術も確認されており、琉球陶器には早い時期から複数の製陶技術が導入された可能性も指摘されている。その後、17世紀後半には窯詰め方法のひとつである目積みが貝からサンゴへと変化し、18世紀以降には薩摩焼以外の系譜と想定される窯道具が登場するなど、薩摩焼技術の土着化(琉球化)や新たな技術の受容も窺える。

上焼は、湧田古窯跡の発掘調査成果から17世紀後半に登場する黒釉を施した製品が嚆矢と考えられる。かつては、灰釉を施した広口の碗が最初期と

想定されていたが、現時点で当該資料の生産開始を17世紀後半まで遡らせるのは難しい。文献史料では17世紀後半に中国からの技術導入が想定される記述もあるが、最も具体的なのは1730(享保15・尚敬18)年に仲村渠致元が薩摩の堅野と苗代川で陶法を学び、帰国後に薩摩式の窯を築いたとの記述である。この時に導入されたのが連房式登窯で、

当該期から上焼の生産が本格化した可能性が高いものの、今のところ生産地遺跡の発掘調査で本説を裏付ける考古学的成果は確認されていない。消費地遺跡の出土状況は文献史料と概ね整合するが、荒焼のように製品の成形・施釉方法・窯詰め・窯道具から薩摩焼の技術的影響を抽出する研究は緒に就いたばかりであり、今後の進展が期待される。

《研究発表5》 幕末から明治初期にかけての初期輸出向け薩摩焼の特徴と展開について —在外資料調査の成果を含めて

深 港 恭 子

白色陶器の「白薩摩」に上絵付けを施した「薩摩錦手」は、幕末期、主として万博を通じて評価を獲得し、明治初期には西洋の市場を席卷していった。こうした海外への販路を開くきっかけとなったのは、慶応3年(1867)のパリ万博における人気であり、続く明治6年(1873)のウィーン万博での高い評価により、国際的評価が定まったとされる。しかしながら、この時期の薩摩焼にどのような特徴がみられ、海外で評価された薩摩焼の姿とはどのようなものであったのかについては、必ずしも明らかになっていない。

そこで、海外の美術館が所蔵している明治初期の万博の出品作についての調査の成果を通じて、それらの特徴について検討し、万博を前に、海外の嗜好を反映した姿へと変化していたのか否かについても考察する。その検討にあたって、適当と思われる事例に、幕末頃から製作され始め、明治9年(1876)のフィラデルフィア万博まで、その存在を認められる獅噛み不遊環耳のある広口の瓶子形花瓶があり、花々に鳥や蝶を添えた華やかで絵画的な絵付けに特徴がある。これらの作品の中には、幕末から明治初期の作例と考えられる共通する刻印をもつ瓶子形花瓶があり、宮内庁三の丸尚蔵館や

徳川美術館に事例があるのに加え、刻印のないものも含めると十数例を確認でき、同形の製品はウィーン万博、フィラデルフィア万博の出品作にも確認できる。このような一定量の生産を確認できる同形の花瓶が海外にもたらされていることは、輸出向けスタイルに位置づけられる製品が鹿児島で生産されていたことをうかがわせる。また、これらの一連の花瓶の特徴を細かく捉えることにより、海外向けの製品が時代とともにどのように変化したのかについても捉えることとする。

また、万博出品作から捉えられる特徴と、江戸時代の薩摩錦手との比較により、海外向けの製品が、そのように生み出されていったのかについても考えたい。しかしながら、御用品としての薩摩錦手の姿が明らかにされていないことから、まず比較の準備として、最高級の御用品であった薩摩錦手の姿がどのようなものであったのかについて、大名家に伝来する作例の調査の成果をもとに、御用品としての薩摩錦手の姿と特徴を、十数点の作例をもとにうかがい、御用品としての薩摩錦手の描画法を踏襲しながら、より華やかなものへと意匠を変化させていった様相について述べる。